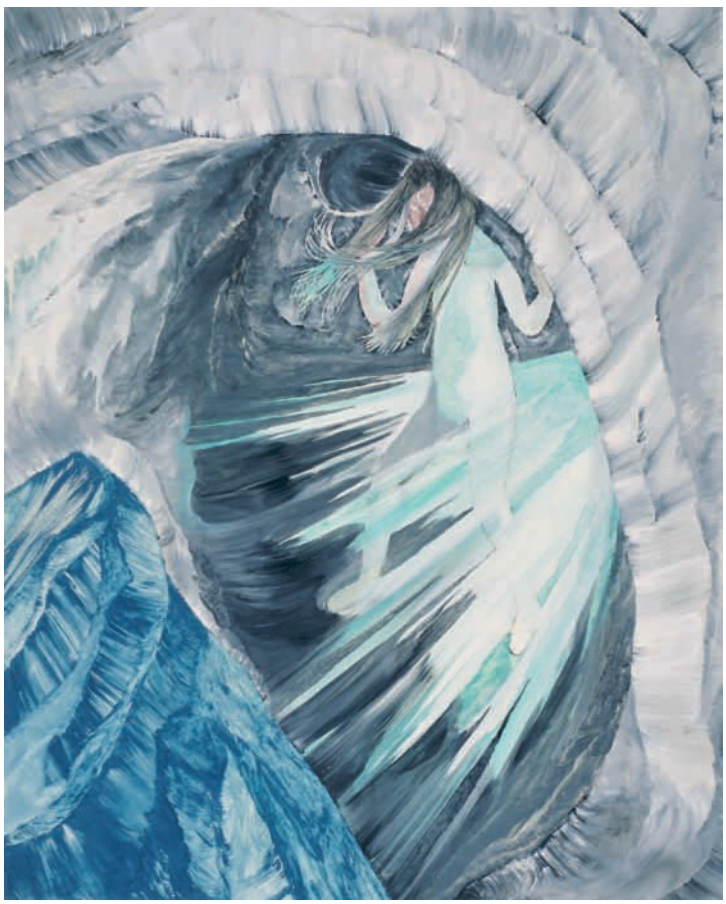
岡崎市美博ニュース
【アルカディア】
Codio

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.44



村瀬恭子《Cave of Emerald（Exit）》
2008年

エッセイ
桃の花咲く隠れ里の物語（2）
―「桃源郷の世界」展のための序曲

近代日本画にみる女性の美
―鏑木清方と東西の美人画

はじめまして おひさしぶり
―コレクションから―

村山槐多《無題》
―幻のデッサンを収蔵するにあたって

青野正《天をめざす街》

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

桃の花咲く隠れ里の物語（2）

―「桃源郷の世界」展のための序曲

館長 芳賀　徹

中国でいちばん大きな河、揚子江を東から西にずっとさかのぼってゆくと、その中流のあたりに洞庭湖という大きな湖がひろがっています。中国では同じ揚子江の下流にある鄱陽湖についで二番目の大きさで、日本の琵琶湖の4倍あまりの面積があるそうです。

洞庭湖は揚子江につながるその北岸の方も、瀟水とか湘江とかたくさんの川が流れこむ南岸の方も、昔から風光の美しさによって有名で、李白、杜甫などの唐代の大詩人たちがその風物を詩に詠みました。宋代になると南岸のデルタ地帯の景色は「瀟湘八景」という画題に選ばれて、今日にいたるまで中国でも日本でも繰り返し絵に描きつづけられています。

陶淵明の「桃花源記」の物語の舞台になるのは、この洞庭湖の西側にひろがる丘陵地帯で、昔から武陵とか武陵原と呼ばれていました。西北に向かってしだいに高い山々が連なる一帯で、その山あいから流れ出る谷川が合流してはいくつもの川となって洞庭湖に流れこんでいました。物語の主人公はこの武陵のどこか一角に住んでいた人で、「魚を捕うるを業と為す」というから、山あいの川や谷で漁師をしていた人なのですね。

こうしてこの物語の展開する場所も、主人公の職業も、はじめからはっきりと述べられています。「むかしむかし、あるところに…」とはじまるお伽ばなしとは、まるでおもむきがちがいます。他方、物語の起きる時代ももちろんはっきりしていて、「桃花源記」のいちばん最初に「晉の太元の中」と書かれています。つまり、西暦の4世紀初めから約100年、主に江南の地方を支配した東晉という王朝の後半の時代で、西暦でいえば376年から396年まで20年間の、太元という年号の一時代ということになります。それは西暦365年生まれの陶淵明が12歳から32歳の年代で、彼が官職を辞して故郷の村に帰ったのが西暦406年、そしてこの「桃花源記」を書いたのがそれから間もないころとすれば、いまからほんの十数年前、あるいは二十数年前の話だが…ということになります。

いまの私たちにひきつけていえば、戦前の昭和にまでもさかのぼらない、昭和も終わりに近いころだった、という感じになるのでしょう。桃源郷の物語は谷間の向こう側の不思議な隠れ里の話のはずなのに、こうして時も所もはっきりしていて、意外に身近なところに起きたほんとうの事件という語り口ではじまるのです（それだけに、最後の成りゆきがいっそう不思議な、忘れがたいものとして心に残るのでしょう）。

さて、洞庭湖の西の武陵原のいずれかの川筋で、魚をとって暮らしを立てていた一人の男が、いまから十数年前のことになるが、太元年間のある年の春のある日（なぜならやがて桃の花の満開の情景が出てくるのだから）、いつものように自分の舟をあやつって、ごく気軽に仕事に出かけました。朝早く出たのか、それとも朝御飯のあとにゆっくりと舟を漕ぎだしたのか、そこまではわかりません。魚のとれ具合は季節によって、日によって、またどの流れかによって、いろいろと変化しますが、いずれにしても、この漁師はもう何年も何十年もこの山あいの川や谷を仕事場とし、自分の縄張りとしてきたのでしょうから、さあ今日もうんと魚をとってくるぞと、いさんで出かけたものだったのでしょう。

それにしても漁師というのは、仕事の場所も時間も自分の裁量できめることができるし、行動の範囲も広い、独立と自由の度合いが大きい職業ですね。農民は一生自分の田畑を相手に働き、とくにこの「桃花源記」の昔では、自分の村から外に出ることさえめったになかったでしょう。お役人とか教師とかおまわりさんとかは、陶淵明も若いときに地方官として経験したことですが、いつも身分に縛られ、時間に拘束され、口のきかたまできめられていて、漁師のように自分の思うように動きまわることなどできません。そして商人はその日その日の勘定で頭がいっぱいだし、職人はだいたいいつも自宅の仕事場にこもりっきりで働いている。

とすると、独立独歩の漁師というのは、中国古代の物語にこれもよく出てくる薬草採りなどと同じように、さまざまな不思議にめぐりあい、冒険をする機会の一番多い職業ということになりましょう。それだからこそ作者陶淵明は、「桃花源記」の主人公に漁師の男を選んだのだと思います。日本の昔ばなしでも、亀の背中に乗って龍宮城を訪ねるのは漁師浦島太郎でした。

さて、この武陵の漁師はこの春の日、いつものように漁に出かけました。自分がいちばんよく知っている谷川を漕いでゆくのですから、鼻唄など口ずさみながら櫓をあやつっていたのかもしれません。ところが、この日はあまりにあたたかいいい春の日ざしで、櫓を使いながらほんのつかのまでもついうとうととしてしまったのでしょうか。それとも浦島太郎の場合のように、この日に限って、むやみに魚が釣れてうれしくて、しばし夢中になってしまったのでしょうか。

はっとして気がつくと、自分の小舟はいつのまにか全然知らない谷川に入りこんでしまっていました。どこからどれほど来たのかもわからなくなってしまっています。そう気がついたのは、谷川の両岸に広く遠くまで桃の林がつづき、それが一面にあの美しい紅の花を咲かせていたからです。桃花の林のなかには他の木は一本も混じっていません。桃の木々の下には、折からの春の日ざしに青々と下草が萌え出て、なにかいい香りさえして美しく、そのやわらかな若草の上に桃の花の花びらが風もないのにはらはらひらひらと舞い散っているのでした。

漁師はあっけにとられてこの桃花の谷の風景をながめていました。その美しさに、舟を漕ぐのも、魚をとるのも忘れて、ただ呆然としていました。自分の縄張りであるこの山あいの川筋に、こんな桃花の谷があったなどとは、これまで長い間、まったく知らなかったのです。見たことも聞いたこともなかったのです。（次号につづく）

EXHIBITION

会期　平成22年4月3日（土）～5月16日（日）

近代日本画にみる女性の美
ー鏑木清方と東西の美人画

学芸員　稲垣 満春

姿かたちや立居振舞いから、特有の優しさや秘めた強さといった内面性をも重視して女性をとらえた絵画を「美人画」と呼んでいます。女性を主題とした絵画は、江戸時代の浮世絵に代表されますが、近代にはいるとそれまでの様式化された浮世絵美人とは異なり、新感覚による清新な色彩と洗練した構図、さらには現実味を加味させた女性像が描かれました。明治、大正、昭和にかけ「美人画」は絶頂期を迎え、日本画の中で重要な一ジャンルとして確立するとともに、東京、京都、大阪の画壇の気運を一挙に活気づける起爆剤にもなりました。本展では、「美人画」といえば福富太郎氏の名前が連想されるほど内外にその名が知れわたっている福富コレクションから、近代を代表する美人画家である鏑木清方と、東西の美人画家33人の作品70点を3部構成で紹介しています。

鏑木清方

明治11年、東京神田に生まれた鏑木清方は、13歳で浮世絵出身の絵師・水野年方に入門し、16歳という若さで父の経営する『やまと新聞』に挿絵画家としての一歩を踏み出します。明治30年代に入ると、挿絵を描く一方で本格的な日本画の制作を行い、昭和40年に文展が開設されると、美人画をはじめとした意欲作を次々と発表し、その地位を不動のものとしました。明治、大正、昭和の三時代を生きた清方は、関東大震災や昭和の戦火を経験しましたが、その惨事によってもう見ることができなくなった明治の風俗や江戸情緒に、生涯にわたり限りない郷愁をよせ、文学的教養と都会的感覚を伴い、清新な芸術味のある作品を数多く残しました。

鏑木清方《薄雪》大正6年

福富太郎氏の美人画の収集は、近代美人画の巨匠鏑木清方に始まったといわれ、清方の作品はコレクションの中心的な存在となっていますが、今回はその中から20点を展示しています。

東の美人画

清長や歌麿が独特の美的形式を開拓してから百年。近代を迎えていた東京では、新しい日本画の模索が始まり、女性表現も従来のパターン化していた浮世絵美人から、江戸浮世絵の「粋」の伝統を守るなかで、その線描と日本画材の美しさを活かして描く、現実感あふれる女性像が現れます。これが近代美人画です。その美人画の描き手となった多くは、浮世絵系の出身者で、当時出版文化の興隆に乗じて多種発行されていた新聞や版本の挿絵に携わっていた人々でした。彼らは、めまぐるしく移り変わる時代に呼応し、今を生きる人々の美意識や人生観を素早く受け止めるとともに、それまでの職人的な絵師ではない、日本画家という近代的意識の自覚をもって、新しい時代が求める女性を見事なまでに描きました。《東の美人画》では、東京を中心に活躍した画家22人の作品31点を展示しています。

伊東深水《戸外は春雨》昭和30年

【展示作家】　菊池容斎、小林永濯、石井鼎湖、渡辺省亭、尾形月耕、富岡永洗、水野年方、寺崎広業、梶田半古、尾竹竹坡、鰭崎英朋、池田輝方、竹久夢二、山村耕花、池田蕉園、矢沢弦月、小村雪岱、山川秀峰、伊東深水、小早川清、横尾芳月、鳥居言人

西の美人画

大正から昭和にかけて絶頂期を迎えた美人画は、近代日本画の中でなくてはならない一ジャンルとなりますが、これには北野恒富らの率いる大阪画壇の貢献がありました。「閨秀（けいしゅう）画家、三園」と称された東京の池田蕉園、京都の上村松園、大阪の島成園の三人はつとに有名ですが、その追随者の多くに若手の大阪出身者がいたことはあまり知られていません。大正4年の第9回文展で美人画を一堂に集めた「美人画室」が設けられ、その入選者の多くが10代後半から30代前半の大阪画壇の若い女性画家たちであったことは、その象徴ともいうべき事柄といえるでしょう。女性が社会に出る条件や環境が整っていなかった時代、男性と互角にわたりあい、さらに東京や京都画壇を圧倒した浪速女性画壇の華やかな競演は注目すべきことでした。男性の視点で描かれた美人画が多数を占める東とは異なり、女性の視点から主題や構成を選び、女性の強さや優しさ、哀しみを映し出している作品が多いことは西の美人画の特徴といえるでしょう。《西の美人画》では、京都、大阪で活躍した画家11人の作品19点を展示しています。

甲斐庄楠音《横櫛》大正7年頃

【展示作家】　上村松園、伊藤小坡、北野恒富、松浦舞雪、秦テルヲ、島成園、寺島紫明、松本華羊、岡本神草、甲斐庄楠音、梶原緋佐子

EXHIBITION

会期　平成22年5月22日（土）～7月4日（日）

はじめまして　おひさしぶり

―コレクションから―

学芸員　千葉 真智子

『方寸』

岡崎市美術博物館には、残念ながら常設展示室がありません。そこで毎年企画展の合間に、岡崎市美術館、おかざき世界子ども美術博物館の作品を含む収蔵品展を開催し、コレクションをご覧いただく機会を設けています。今年は、平成20年度以降、新たに収蔵した作品をご紹介すると共に、これら新コレクションの収蔵意義を示すために、これまでに同じコンセプトのもとに収集されてきた作品も併せて展示いたします。今回ご紹介するのは、大きく分けて3つの展示グループです。

一つは、次ページに紹介されている村山槐多の《無題》をはじめとした、近代日本美術コレクション。岡崎生まれの山本鼎と、鼎の従兄弟の村山槐多、そして岡崎で晩年を過ごした藤井達吉など、岡崎市ゆかりの作家のなかには、広く近代日本美術界に少なからぬ足跡を残した作家がいます。槐多と言えば、最近も酒井忠康氏の『早世の天才画家―日本近代洋画の十二人』（中公新書）に取り上げられるなど、その破天荒で凝縮された人生と表出的で濃密な絵画作品は、半ば神話化された感もあります。一方の鼎は、石井柏亭らと美術雑誌『平旦』（明治38年）を、続いて『方寸』（明治40年）を出版して、「版画」の進展に努め、また、パリ遊学を経て、ロシア経由で帰国の途に着くと、ロシアで見聞した農民美術運動や児童画運動を日本で実践しようと、客観的・教育的観点に基づく活動を積極的に展開しました。五十殿利治氏によれば、鼎は、さらに、当時ロシアで誕生したスプレマチズム絵画をはじめとするロシア・アヴァンギャルド芸術をいち早く日本に紹介したという点でも非常に注目すべき人物だったと言います。そして、この近代コーナーでは、同じ頃、岡崎と東京を拠点にしながら、画家、演劇評論家としても活躍した近藤孝太郎の編集雑誌『試作』（大正14年創刊）もご紹介します。ビアズリーなど世紀末象徴主義の影響を思わせる『試作』の表紙デザインは、岡崎という地方で出版されたとは思えない高質なもので、なるほど、近藤の版画については、版画家小野忠重が『近代日本の版画』（昭和46年）にも取り上げ、評価するほどでした。近藤はまた、舞台評論家としても注目すべき人だったようで、1934年に再び上京すると、『音楽新聞』『舞踏芸術』などに積極的に寄稿しました。第1章では、こうした近代日本美術の足跡を岡崎との関わりも含めご紹介します。

続いては、新コレクション、レオノール・フィニ《二つの顔》やジョアン・ミロ《巨人の目覚め》と共にご紹介する、シュルレアリスムの作品群です。「マインドスケープ（心象風景）・ミュージアム」を愛称に掲げる当館では、20世紀最大の美術運動の一つでもあったシュルレアリスムを収集の方針に挙げており、これまで地道に作品を収集してきました。展示では、その一部をご紹介したいと思います。

そして、最後にご紹介するのが、村瀬恭子《Sherbet》《Cave of Emerald（Exit）》をはじめとする現代美術コレクションです。今ここに生きる私たちの考え方やものの見方を反映した現代美術作品は、当館の重要なコレクションの一つとなっています。村瀬さんは、ちょうどこの4月から、隣の豊田市美術館で個展が開催されるなど、近年活躍目覚しい作家の一人です。当館では、2006年に開催した「森としての絵画―「絵」のなかで考える」展に出品していただき、今回収蔵に至ったのですが、渦巻くような、たゆたっているかのような筆のストロークと、何層にもレイヤーが重なっているかのような不可思議な絵画空間は、見るものを惹き付けて止みません。洞窟のシリーズは、豊田市美術館の個展でも広く展開していますが、今回の出品作はその出発点にあたるとも言える作品です。また、村瀬さんの作品と併せて、同じく、線と色の関係性から、特異な絵画空間を展開する法貴信也さんの作品など、現代作家のコレクションの一部ご紹介する予定です。

3つのコレクションのグループは、それぞれ異なるものですが、この機会に各時代、各地域の作家の凝縮された表現を堪能いただければ幸いです。

レオノール・フィニ《二つの顔》1965年頃

法貴信也《無題》2006年

COLLECTION

村山槐多《無題》
―幻のデッサンを収蔵するにあたって

学芸員 村松 和明

fig.1 村山槐多（1896-1919年）

夭折の詩人画家として知られる村山槐多（fig.1）。彼は明治、大正の時代を駆け抜けるようにして、22歳でその生涯を閉じた。大正期の「デカダンス」を体現したような彼の絵画と詩作には、対象把握の凄みがあり、現在でもその評価は高い。

村山槐多の本籍地が岡崎であったことはあまり知られていない。彼の母親たまは岡崎（花崗町）に生まれており、その姉たけは創作版画運動で知られる山本鼎の母である。つまり槐多と鼎は、岡崎の地に縁をもつ従兄弟同士ということになる。

fig.2 村山槐多《無題》1916年 木炭、紙 62.2×47.8cm 岡崎市美術博物館

槐多は横浜生まれとされているが、出生届は1896年9月15日に岡崎に出されている。徴兵検査も本籍地である岡崎で受けており、彼自身にとっても思いの深い場所であった。

山本鼎にその画才を見いだされて画家になる決意をした槐多は18歳で上京、まもなく日本美術院展覧会で院賞を受賞、院友となり頭角を表す。当時の作品を横山大観が自前で買い上げたとの逸話も残る。槐多は小説や詩もよくしたが、それはまた芥川龍之介が賞賛したほどであった。ところが彼は、失恋、放浪、酒びたりなど退廃的な生活を重ねたため肺結核を病み、1919年2月に雪混じりの雨の中に飛び出し、危篤となって22歳で絶命する。

このたび収蔵することになった《無題》（「村山槐多 一九一六年一月二日」と記入:fig.2）は、槐多が急逝した年に、仲間たちによって開かれた「村山槐多遺作展覧会」（兜屋画堂：1919年11月11日～30日）に出品された人物デッサンである。本作はその展示を最後に所在不明となり、画集などには重要作品として図版の掲載などはされてきたが、研究者の間でも存在の見えない「幻の槐多作品」となっていた。

fig.3
村山槐多《のらくら者》1916年
木炭、コンテ、紙76.5×57.5cm
横須賀美術館

ところが昨年、《無題》を所有するという方から「村山槐多の作品を積極的に収集、研究されている岡崎は、この作品にご興味はありませんか」とお電話をいただいた。にわかには信じがたい申し出ではあったが、現在その作品は名古屋にあるとのことだったので早速保管場所にうかがうことにした。するとそこには、まぎれもない村山槐多の《無題》があった。実作品に対面した瞬間、槐多にしか描きえぬ気迫とでもいおうか、やはりその凄みに圧倒された。本作は、ゆがんだ表情でこちらに向かって手招きのしぐさをみせる奇妙な男と、背景に引き込まれるような強調された塀の表現が目を引く。

槐多自身が、デッサンに魅力を感じ、その表現を追求していたことから、彼の素描は油彩作品と比べてもその評価は高い。本作は、彼が修練してきた描画技術と蓄えてきた知識や思考が熟し、それが画面に直截的に表れた、いわば槐多19歳にしてひとつの到達点を示す作品である。同じく1916年に描かれた代表的素描《のらくら者》（fig.3）と共通して象徴主義、とりわけエドワルド・ムンクの影響が指摘できる。

槐多がこの前年の5月に開催された岸田劉生の個展（田中屋美術店）を見て感動し、影響を受けたことも忘れてはならない。劉生を意識し続けた槐多は、劉生の代表作となる代々木の《道路と土手と塀（切通之写生）》（fig.4）と同じ場所を後に描いている。《無題》の背景に見られる中央奥に向かって強調されたパースと、その先に配された雲の形などは《道路と土手と塀（切通之写生）》との類縁性が見られる。劉生がこの油彩を描いたのが1915年11月5日であるから、槐多が《無題》を描いたのはそれから約一ヵ月後、翌年の1月2日である。よって槐多が劉生のその油彩を見てから自作に取り入れて描いたことも否定はできないが、それよりも以前に、《築地居留地風景》（1912年）など、同じく劉生の風景画の特徴といえる中央に消失点をすえた作品に影響されていた可能性は高い。

fig.4 岸田劉生
《道路と土手と塀（切通之写生）》
1915年 油彩、カンヴァス58.3×54.4cm
重要文化財 東京国立近代美術館

それでは中央に描かれた人物は誰なのか。槐多は自分の顔を「悪相」といい、とくに眉間に縦に刻まれた深いしわを「鬼の線」と呼んで嫌っていた。彼が描いた現存する9点の自画像を比較してみると、このしわの深さが、そのときの彼の苦悩の反映であったともとれる。《無題》に描かれた人物の額には、このしわが異様なほどに深く長く刻み付けられている。このことから「自身を描いた」とみて間違いない。当時の彼は、極度の貧窮と父との争いとによって心身ともに荒んだ状況にあった。混沌としていた彼は、本作では他の自画像のように鏡に映った顔を描くのを止め、内面に潜む恐ろしく変容してしまった自己の精神の有様を、象徴主義に倣ってここに描き出したのではないか。ゆえに槐多は、これに「自画像」と書き込むことをためらい、「無題」というよりも「無記入」のままにしてしまったのであろう。

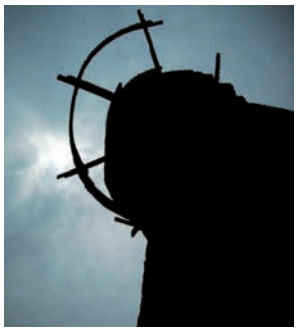
本作は一世紀近くもの間、誰の目にも触れることなく、大正の空気を留めたままひっそりと保管され続けていた。そのため驚くほど作品には劣化が少なく、槐多の作品のなかでも最も状態の良いもののひとつと思われる。そのためこの作品を見ていると、絵を描かずにはいられずに、命を削って生き急いだ「火だるま槐多」（高村光太郎の言葉）が、真新しい舶来のデッサン紙を手に入れて夢中になって木炭を走らせている、そんな彼の息遣いさえも、今もって感じさせるのである。

TOPICS

青野正《天をめざす街》

学芸員 村松 和明

《天をめざす街》（Dream of Heaven）は、高さ5メートルにも及ぶ砦と、その周辺に立ち並ぶ六本の塔とによって構成されている。砦は岡崎市街をはるか遠方に見渡し、風を受けながらその悠久の歴史を見守る象徴とされ、六本の塔は、砦の追い風となり、天を目指す指向性によって、未来への期待と永続性を表現している。



《天をめざす街》の中心に立つ「砦」近景

この作品のごつごつとした表面の独特な処理は、原初的で力強い。古代の遺跡のような、風化した遺構のような、そんな時間の経過の重厚さまでも感じさせる。よく見ると、ギザギザの鉄の輪が何層にも積み上げられることで塔のかたちを形成していることがわかる。

制作した彫刻家、青野正氏にその行程を聞いたところ、厚さ4センチ程の鉄板を、のこぎりの歯のようにギザギザに溶断して棒状とする。それに熱を加えて円く変形させてフラフープ状の大小さまざまな鉄の輪を作り、それを積み上げては溶接していくという作業の繰り返しなのだという。

このような気の遠くなりそうな、地道な手作業によってこの巨大なモニュメントは制作されていることを知れば、漠然と眺めているだけでは分からない、制作過程における作家の鉄と対峙する姿勢や込められた葛藤や思いまでもがそのなかに在ることが感じられることであろう。

それにしても青野氏は、このごつごつとして重量を感じさせる巨大な作品からイメージされるような、筋骨粒々な人物でもなく巨漢でもない。むしろ小柄で、フットワークの軽い気さくな方である。青野正氏は1955年徳島県生まれ。積極的に個展やグループ展に出品して活動を続けている。東京造形大学を卒業した翌年、1981年の新制作協会展で新作家賞を受賞後、数々の賞を受けている。

《天をめざす街》　全景

《天をめざす街》の周囲に置かれる「塔」近景

この《天をめざす街》の中心に立つ砦も、2000年に美ヶ原高原美術館で開催された「現代彫刻の展望―時間の記憶―TUES 2000」においてTUES賞を受賞したものをベースに手を入れたものである。青野氏は、このような力強い鉄の造形をこれまでもたくさん制作してきたが、なかでも本作は最大のもので代表作といえるものである。

岡崎ライオンズクラブから創立50周年を記念して、このようなモニュメントの寄贈をいただけたことは誠にありがたいことである。10年前の創立40周年のおりには、当館の入口正面にあるゼロ・ヒガシダ作の《メセイヤ》を寄贈していただいが、いまではすっかり風景の一部となり、当館のシンボル的な存在となっている。

記念式典テープカット（4月3日）
左から二番目が青野氏

それに続いて今回、この《天をめざす街》をいただくことになった。10年前とは比較にならないような未曾有の不況といわれるなかにおいて、本作のような大作が寄贈、設置されることは、他市では類例もない。

今回の壮大なモニュメントの設置は、岡崎ライオンズの皆様が、真摯に続けてこられた地元に密着した地道な活動の成果によって実現されたものであり、岡崎の未来の明るい指標をここに示したものといえる。

本作は、当館へのアプローチとなる「風の道」にふさわしいモニュメントとして、これからもますます、市民の皆様に親しまれていくことであろう。

市民の憩いのランドマークとなっている

TOPICS

●郷土館の閉館
●美博TOPICS

郷土館を閉館しました

朝日町の岡崎市郷土館は、平成22年（2010）4月1日から内部の一般公開を中止し、閉館いたしました。建物の経年劣化による傷みおよび耐震補強のための保存修理事業に取りかかるための措置です。

昭和44年（1969）に開館した郷土館は、大正2年（1913）に額田（ぬかた）郡公会堂・額田郡物産陳列所として同敷地内に建てられた建物をほぼそのままに、公会堂を展示室、物産陳列所を収蔵庫として活用してきたもので、「郷土の歴史」をテーマにした常設ならびに企画展示と、岡崎市および周辺地域の民俗・歴史・考古資料の収集・調査・研究を行ってまいりました。そして、平成11年12月1日には、公会堂と物産陳列所という二棟の建物が一組で現存する数少ない事例として歴史的価値の高い建造物との評価を受け、「旧額田郡公会堂」「旧額田郡物産陳列所」として、国の重要文化財に指定されていたものです。

岡崎市郷土館（展示室として使われ、内部が公開されていた旧額田郡公会堂）

しかしながら、建てられてから97年、郷土館としても41年が経過して老朽化が進み、天井の漆喰が落下するなどの危険性の懸念や、大地震が発生した場合の来館者の安全確保が困難な状況になってきました。公共施設の耐震化対策が進むなかで、郷土館建物は重要文化財であるために単純な耐震補強工事はできず、やむなく閉館とした上で対策を講じることとなりました。今後は岡崎市が重要文化財としての保存整備計画を策定の上、文化庁の指導のもと「建造物保存修理事業」として耐震化と合わせて修理を進めてまいります。

なお、これまで郷土館を窓口としていた郷土資料の寄贈などについては、岡崎市美術博物館にてひき続き行ってまいります。郷土館への長年にわたる皆様方のご利用、ご協力につきまして、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。今後は、郷土資料の拠点としても美術博物館へのご理解、ご協力を今まで以上にお願い申し上げる次第です。

美博TOPICS

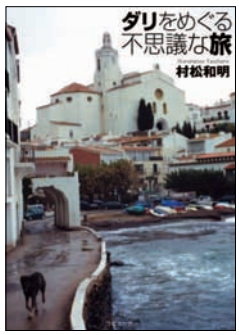
＊芳賀徹（当館館長）の著書が出版されました。
芳賀徹『藝術の国日本―画文交響』角川学芸出版　平成22年2月発行
徳川江戸時代から現代まで、日本の美術と文学の両分野を交々に語るエッセイ集。

＊千葉真智子（当館学芸員）企画展「あら、尖端的ね―大正末・昭和初期の都市文化と商業美術」所収論文「尖端生活の諸相と都市の中の商業美術」が、全国美術館連絡協議会で美連協カタログ論文賞優秀論文賞を受賞しました。

＊村松和明（当館学芸員）の著書が出版されました。
村松和明『ダリをめぐる不思議な旅』ラピュータ　平成22年3月発行
ダリ、ミロ、ガウディーを生んだカタルーニャの地を巡り、紀行文と美術論を交えながら、画家たちの知られざる真実に迫ります。

芳賀徹『藝術の国日本―画文交響』
角川学芸出版

『あら、尖端的ね
―大正末・昭和初期の都市文化と商業美術』



村松和明『ダリをめぐる不思議な旅』
ラピュータ

INFORMATION

■展覧会スケジュール

4月3日(土)～5月16日(日)

近代日本画にみる女性の美 ―鏑木清方と東西の美人画―

浮世絵や近代美人画のコレクターとして有名な福富太郎氏のコレクションから秀逸な作品を選んで構成する展覧会です。近代日本画に欠かすことのできない「美人画」は、明治・大正・昭和期に絶頂期を迎えました。鏑木清方をはじめ、伊東深水、上村松園、北野恒富など近代に活躍した作家34人による「美人画」70点を展示しています。

5月22日(土)～7月4日(日)

はじめまして おひさしぶり ―コレクションから―

近代日本を代表する村山槐多の作品をはじめ、現代美術で注目を集める村瀬恭子、女性シュルレアリスト レオノール・フィニの作品など、近年新たに収蔵された絵画作品を中心に、岡崎市所蔵の優品を集めてご覧いただきます。

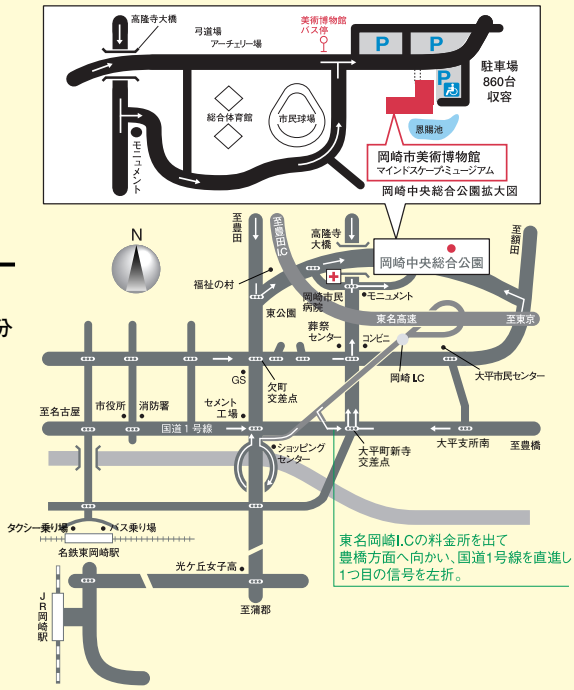
7月17日(土)～8月29日(日)

日蘭通商400周年記念「阿蘭陀とNIPPON ～レンブラントからシーボルトまで～」

オランダと日本の交易は、1609年に平戸オランダ商館が設置されたことに始まります。本展覧会は、日蘭通商400周年を記念し、1609年から幕末までの250年間に及ぶ日本とオランダの交流の歴史を、両国の博物館・美術館が所蔵する絵画・工芸・歴史・考古資料等を通じて紹介するものです。

●開館時間／午前10時～午後5時（6月～9月は6時まで）
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
●休　館　日／毎週月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②から25分、
（名鉄バス）　「中央総合公園」行乗車「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約25分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分



OKAZAKI
CITY MUSEUM

Arcadia

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第44号　●2010年4月発行　●編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）

MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000（代表）
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html

PRINTED WITH SOYINK
古紙パルプ配合再生紙使用